

Title	プライス卿に就て
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.244- 244
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0244

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フライス卿に就て

一月二十三日の倫敦國際直電にフライス卿の訃報を傳へた。卿は英國自由黨の耆宿で内に在ては愛蘭事務大臣の難局に立ち外に出でては華盛頓に英國皇帝を代表し、政治家としても外交家としても中外に重を爲して居つたが、併しその長處は學者として最も多く發揮せられたのである。政治學史學に於ける造詣殊に遠く、今その重なる著書のみたても左の如く十指に達するのて而も何れも不朽の作である。Holy Roman Empire. (1864. New ed. 1904.) Transcaucasia and Ararat. (1877.) The American Commonwealth. (1888. New ed. 1910.) Impressions of South Africa. (1897.) Studies in History and Jurisprudence. (1901) Studies in Contemporary Biography. (1903) South America. (1912) University and Historical Addresses. (1913) Essays and Addresses in War Time. (1918) Modern Democracies. (1921) のうちでも『神聖羅馬帝國』、『米國民政論』、『近代民主政治』を擧げて三大傑作と爲すには何人も異論あるまい。出生は一八三八年の五月十日であるから數へ年にすれば八十五歳であつた。愛蘭のベルファストに學校を經營して居つたツエエムス・フライスの子で同じくフライスと呼びグラアスゴ大學卒業後牛津に轉じ一八七〇年から九三年まで牛津の民法教授であつた。一九一三年の四月に米國大使を致仕して世界を漫遊した際日本にも來たことがあつた。翌年一月の新年叙勳式に政治上の功勞を以て子爵を授けられたが是より先既に文勳によつて Order of Merit をも授けられた。今獨逸近代史學界の泰斗たる萊府のラムブレヒト先生が一九〇四年に米國漫遊中フライス卿と會見した際の印象記を『アメリカアナ』のうちから譯出して兩大陸史家の風貌を偲ぶ便とする。

『フライス君と半時間有益な談話を交換した。元氣の旺盛な老人で英國にかゝる人物のあるは羨しい。その上に老人は人情に敦く學者として信用が重い。再三訪問したが折悪しく行違ひとなつて漸く會見することが出來たのである。立派に獨逸語を話す。自分の日本研究を獎勵して直ちに金子堅太郎男爵への紹介狀を書いて呉れた。非常に質問が好きで十分間に自分の米國太平洋方面に於ける視察に就て「米國民政論」の著者として知らんと欲することを悉く質問した。而して自分は正確に答へ得たことを喜ぶものである。蓋しフライス君は毫も訊問の態度に出でず而してその目的は敢て之を掩はんことせなんだのである。ランケも質問が好きであつたが唯もつと盛んに問を發した。トライチケも同じく詳細に質問したが併し躁急であつたこの三人は何れも大歴史家であるが是に付けても思ひ出さるるものは希臘語の *topography* を云ふ言葉は單に物語ると云ふことのみで無く又質問すると云ふことを意味して居ることである』

時にフライス卿は六十七歳而してラムブレヒト先生は四十九歳であつたのである。併し今や共に故人となつて仕舞つた。